

マンサブダール制は、徴税権と支配権のどちらを与えたのですか？  
イクター制やティマール制との共通点はあるのですか？

イクター制、ティマール制は、土地および税に関する制度ですが、マンサブダール制はそうではありません。マンサブダールとは「位階(マンサブ)保有者(ダール)」という意味です。以下に説明する通り、マンサブダールはマンサブに応じた俸給を、多くの場合ジャーギールというかたちで与えられました。イクター制やティマール制に対応するのはジャーギール制の方です。

ムガル帝国では、有力な人士に対して君主がマンサブを授与する制度がおこなわれていました。これは研究者によってマンサブ制と呼ばれます(マンサブ保有者に焦点を当ててマンサブダール制と呼ばれることもあります)。これは第3代君主アクバル(在位1556～1605)によって、1573/74年に導入されました。マンサブは切りのよい十進法の数値で表示され、当初は最高値5000から最低値10まで、66の位階が設けられていました。マンサブ値の大小が位階の高低を表しており、マンサブは君主の裁量で加増・削減されました。君主の評価を失ったマンサブダールがマンサブを廃止されることもありましたが、マンサブダールが引退したり死去したりすると、そのマンサブは返上され、子孫に継承されることはありませんでした。このようにマンサブ制には、君主の下に人士個人を序列づける貴族制度の側面があります。

一方、マンサブの数値は、マンサブダールが保有すべき騎兵の数をも表していました。また馬、象など軍用動物の定数もマンサブごとに細かく規定されていました。このようにマンサブが軍事義務を表示していた点で、この制度には軍事制度としての側面

もあるといえます。しかしすべてのマンサブダールが定数通りの軍備を実際に保有していたかは定かではありません。当時の史料には、騎兵定員の充足率に応じて俸給額を調整する規定がみられるからです。そもそも軍人としての働きが考えにくい財務官僚や宮廷文人にマンサブが授与されることもしばしばありました。

むしろマンサブ制の本質は、マンサブダールの俸給を規定する制度として運用された点にあります。その額は所定の計算式にマンサブ値をかけあわせることによって、年俸額として算出されました。詳細な説明は省きますが、マンサブ制の変化にともない、計算式そのものやその係数が少しずつかわっていったことは、断片的な記録からおおよそたどることができます。

マンサブダールの俸給は、現金もしくはジャーギールとして給付されましたが、後者の方法によることがほとんどでした。ジャーギールとは「ジャー」(場所)と「ギール」(占有)というペルシア語の単語を組み合わせた語です。ムガル帝国の用語としてのジャーギールは、当のマンサブダールの俸給額相当の税収を見込める土地の徴税権およびその土地を意味しました。ジャーギールによる俸給制度、税制度、土地制度の総体を指して、研究上、ジャーギール制と呼びます。また当時の史料で、ジャーギールの給付を受けた者はジャーギールダールと呼ばれました。

ジャーギールは永続的なものではなく、おおよそ3～4年で配置がえされました。また異なる場所にある複数の土地を組み合わせてジャーギールとされることもありましたが、徴税業務の負担から、分散

したジャーギールは受給者から好まれませんでした。またジャーギールはマンサブ同様、個人に属するものでしたので、世襲されることもないのが原則でした。ただし、在来の豪族が帝国に臣従する際、マンサブを授与されると同時に、従来の所領(ワタン)をジャーギールとして給付されることはありました(この種のジャーギールは研究上、ワタン=ジャーギールと呼ばれます)。

以上の説明からわかる通り、ジャーギール制の運用には帝国領全域にわたる地税の評価が必要です。アクバル時代の史料には、領内の州ごとに県およびその下位区分である郡のレベルまで、農地の面積および地税の評価額(当時の用語で「ジャムウ」といいます)を記録した膨大な一覧表が残されています。また農地の等級とそれに応じた単位面積当たりの各種農作物の見込み収穫量も定められていた一方、1561/62年から79/80年までの19年間にわたる農作物の価格統計も記録されています。これらのことから、アクバル時代には大規模な検地がおこなわれると同時に、現金納を前提に地税額が評価されていたことがわかります。地税の現金納はムガル帝国以前からおこなわれていた可能性があります。農作物市場と物流網の整備、および通貨供給の急速な拡大(その背景には銀の世界的な大流通があります)はアクバル治世以降の特徴であり、ジャーギール制に不可欠の前提条件でした。

ジャーギール制の起源について確かな学説はありませんが、マンサブ制・ジャーギール制の導入以前から「ジャーギール」という言葉そのものはありました。16世紀半ば、ムガル帝国を破り、北インドのほぼ全域を支配下におさめたアフガン人の王朝、スール朝のもとでおこなわれた土地の分与制度がジャーギール制のもとになったと推測する説もあります。

なおムガル帝国時代の史料には、ジャーギールの同義語として「イクター」「トユール」という2つの言葉が散見されます。前者はイスラーム諸王朝で広くおこなわれた制度を指す言葉で、デリー=スルタン朝における類似の制度についても用いられました。また後者はイル=ハン国(フレグ=ウルス)やサファヴィー朝といったイランの諸王朝で使われました。「イクター」も「トユール」も、軍事義務に対する俸給として給付された、土地からの徴税権を意味す

る点はジャーギールと同じですので、ムガル帝国でもこれらの言葉が無理なく用いられたと考えられます。

すでに述べたとおり、ジャーギールダールに給付された徴税権は地税評価額に即したものでしたが、実際の税収額(当時の用語は「ハースィル」)は必ずしもそれと同額ではありませんでした。検地や地税が大まかにしかおこなわれなかったり、新規の調査をせずに既存のデータを流用したりする場合があったからです。デカン地方など、新たな征服地で帝国の支配が十分に行き届いていない地方ではこの傾向が顕著でした。帝国政府は実際の税収額を調査・更新して地税評価額との乖離を縮めようとつとめました。そのため17世紀前半、シャー=ジャハーン(在位1628~58)の治世には、年俸額に対するジャーギールの税収額の割合を、満額12カ月分に対する「〇カ月分」とする月割表示が導入され、軍事義務の引下げと引きかえに俸給の切下げがおこなわれるようになりました。さらにアウラングゼーブ(在位1658~1707)の治世にデカン地方への戦線が拡大すると、新たに参入するマンサブダールの増加に、ジャーギール用地の確保が追いつかない状況が深刻化しました。ジャーギールの給付待機者(当時の言葉で「ジャーギール無し」)の増加は、この君主の治世末期までにジャーギール制の機能不全を露呈させることになりました。

ジャーギールダールはジャーギールにおもむき、みずからの徴税員を通じて徴税をおこないましたが、短期間での配置がえを見越した苛烈な徴税は、地域の農民とのあいだに緊張をもたらしました。また帝国政府の規制にもかかわらず、ジャーギールが徴税請負に出される場合が多くありました。徴税請負も含め、過酷な徴税に対する農民の反抗はジャーギール制の前提条件を大きくそこなうものでした。また元来、短期の徴税権として給付され、複数の地所に分散することもあったジャーギールを、地方の有力者層が徴税請負を通じて、長期的に保有し集積する例が18世紀初頭頃からみられるようになりました。以上のようなジャーギール制の危機は、ムガル帝国の緩やかな崩壊の一因をなすものでした。

(ました・ひろゆき/神戸大学大学院人文学研究科教授)

英露対立が「グレートゲーム」と呼ばれる理由は何ですか？  
何がそれほど「重要」なのですか？

**グ**レートゲームは、一般に19世紀から20世紀初頭に中央アジアを舞台にイギリスとロシア(以下、英露)が展開した覇権争いのことを指します。北方から中央アジアに領土を拡大する陸の帝国ロシアと南のインド植民地を確保する海の帝国イギリスとが、外交や軍事からジャーナリズムの言論まで、様々な面で渡りあったという構図です。

この英露の角逐がグレートゲーム、すなわちチェスの大勝負の名で呼ばれるようになったのは、イギリスの作家キプリングの小説『キム』(1901年)が広く読まれたことによります<sup>1</sup>。彼はのちにノーベル文学賞を受賞しますが、この作品は1890年代のインドを舞台に、イギリス人の父とインド人の母のあいだに生まれ、孤児となったキムの冒険を描いています。有能な彼を操るアフガン人の馬商人が実は英領インドの諜報機関のメンバーという設定で、キムがロシア人のスパイと格闘するシーンもあります。英露の熾烈な諜報戦を表した「グレートゲーム」という語は、インドを脅かす専制国家への敵愾心<sup>てきがい</sup>が高まっていたイギリスで定着することになりました。あたかも英露の2大国が中央アジア(当時の用法ではイラン、アフガニスタン、東西トルキスタンを含む地域)というチェス盤の上で勝負するという構図です。ただし、この語は英露だけをプレイヤーと認め、現地の諸勢力は無視するのですから、明らかに帝国主義時代の発想です。現代では大国間の対抗関係の比喻として使われることもあります。

#### グレートゲームの構図と展開

グレートゲームの何が重要なのかを理解するに

は、その構図を中央アジアに限定せず、西アジアから東アジアまで広げて考えてみるとよいかもかもしれません。南下政策をとるロシアと自由貿易の要、海上の通商路とインドの確保をはかるイギリスとの対立の焦点となったのは、黒海と地中海を結ぶオスマン帝国領内の2つの海峡とインド防衛の戦略的な要地アフガニスタンです。東方問題のなかでロシアはムハンマド＝アリーのエジプト軍に圧倒されたオスマン帝国を支援するかわりに海峡の通行権を得ますが(1833年)、イギリス主導のロンドン会議(1840年)でこの権利を失います。この間、イギリスはロシアと友好関係を結んだアフガニスタンを自国に有利な緩衝国家にしようと第1次アフガン戦争(1838～42年)をしかけますが、これは激しい抵抗にあって敗北に終わります。

地中海への進出をめざすロシアは1853年、再びオスマン帝国に宣戦しますが、英仏も参戦したクリミア戦争で大敗します。これを機にロシアは農奴解放や鉄道建設、軍制改革など国内の「大改革」に取り組む一方、進出の方向を中央アジアと東アジアに転換します。ロシアの戦略家はインド大反乱と太平天国がもたらした動揺を好機ととらえ、陸軍は帝国の威信を高めることに躍起となっていたのです。64年以降のロシア軍の中央アジア侵攻は、当初ロシアに臣属するカザフ遊牧民の地域と南の定住民地域とのあいだに明確な国境線を引くことを目標としていましたが、軍事行動はおさまらず、ロシアはオアシス地域を支配していたウズベク系のブハラ・ヒヴァ両汗国を保護下におき(インドの藩王国に相当)、76年にはコーカンド＝ハン国を併合することになりま

す。これに対してイギリスは干渉をひかえる「巧みな無作為」で応じました。ロシアがアフガニスタンにイギリスの勢力圏と認める限り、手出しの必要はなく、ロシアが掲げた「野蛮なアジア人を文明化する使命」という征服の大義も共有できたからです。

しかし、ロシア＝トルコ戦争(1877～78年)でロシアがオスマン帝国を圧倒すると、英露間に緊張が生じました。ロシアの南下を警戒するイギリスがイスタンブルに艦隊を派遣してロシアを威嚇すると、ロシアは中央アジアからアフガニスタンを經由してインドに進軍する計画を立てたからです。しかし、有名なベルリン会議でロシアの南下が阻止されると、この攻撃計画は中断されました。さらにこの間、ロシアはアフガニスタンに軍事支援を約束していたのですが、イギリスが直後に第2次アフガン戦争(1878～80年)をしにかけてきて、アフガニスタンの支援要請にはこたえず、これを見捨てました。その結果アフガニスタンは事実上イギリスの保護国となり、独立を達成するのは1919年のことです。アフガニスタンはまさにグレートゲームに翻弄され続けたわけですが、一方、ロシアはこの間にロシア領とアフガニスタンとのあいだのトルクメン人地域を制圧してロシア領トルキスタンという植民地を完成し、1880年代の半ばには英露間の境界線を定めて中央アジアにおける対英関係をほぼ安定させることとなります。英露の対抗は、清朝の辺境統治がゆるむなか新疆(東トルキスタン)やチベットでもおこりましたが、清朝は辺境統治の再編によって危機を乗り越えました。

### 東アジアにおけるグレートゲーム

英露間の角逐は東アジアでも展開され、必然的に日本もその構図のなかに位置していました。ここでは日本を中心にみておきましょう。日露と親条約(1855年)の締結で有名なロシアの海軍提督プチャーチンの来航は、クリミア戦争さなかのことであり、実際カムチャツカ半島の東岸では英仏海軍とロシア軍とのあいだで戦闘がおこりました。そしてロシアはまもなく第2次アヘン戦争に乗じて清朝とアイグン条約、北京条約を結んで沿海州まで獲得し、太平洋・日本海への進出を本格化させます。1861年にはロシア軍艦ボサドニック号が対馬に來航して居

座る事件がおこりました。ロシア艦長の言い分は、第2次アヘン戦争に勝ったイギリスは武力で脅して対馬を借用するに違いないが、ロシアと提携すれば対馬を守れるというものでした。対応に苦慮した幕府は、イギリスに協力と助言を求め、抗議文をイギリス経由でロシアに送るという方法、つまり国際問題化することによってようやく退去を実現することができたという事件です<sup>①</sup>。また85年アフガニスタンで英露の軍事衝突の危険が生じると、日本海でも英露艦隊がにらみあうことになり、日本は対馬に警備隊をおきました(『歴史総合 近代から現代へ』〈歴総707〉、p.79)。

日清戦争後、英露の日本をみる目はかわります。ロシアは日本ではなく清朝と協同する道を選び、独仏との三国干渉で日本に遼東半島を返還させた見返りに東清鉄道の敷設権を獲得します。これをシベリア鉄道と連結すれば極東におけるロシアの軍事的なプレゼンスは著しく高まりますが、これはイギリスにとっては大きな脅威です。そこで、イギリスは上記の3国に対抗するためにも、日本を極東での戦略的なパートナーに選ぶこととなります。1902年に結ばれた日英同盟はその結果であり、日本はこれを受けて日露戦争に突入しました。この戦争はグレートゲームに終結をもたらす契機ともなります。ロシアは1905年革命に直面して国内の体制の立て直しに取り組まざるをえず、イギリスはドイツの強大化に対応する必要にせまられていたからです。こうして英露は07年に英露協約を結びますが、それは直前の日露協約とも合致していました。

このようにグレートゲームの構図をユーラシア大陸に大きく広げてみると、この間に進行した世界の一体化の様子や、各地におこったできごとが相互に関連していることがみえてくるのではないのでしょうか。グレートゲームの何が重要なのか、という問いに対する答えの1つはここにあります。

①日本語訳として、『少年キム』(斎藤兆史訳、筑摩書房、2010年)、『少年キム』(三辺律子訳、岩波書店、2015年)、『キム』(木村政則訳、光文社、2020年)がある。

②詳しくは、麓慎一「ボサドニック号事件の衝撃」(小松久男編『歴史の転換期 1861年 改革と試練の時代』〈山川出版社、2018年〉所収)を参照。

(ごまつ・ひさお／東京大学名誉教授)